

え ひ め 愛比売

平成17年度 年報

2006

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター

序 文

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターは、愛媛県内における埋蔵文化財に関する調査研究及び県民の埋蔵文化財の保護思想の涵養と普及を図ることを目的として昭和52年に設立され、事業者からの委託を受け、発掘調査を行うとともに現地説明会や遺跡展等を開催し、多くの方々の参加をいただいております。また、関係諸機関とも積極的に協力し、埋蔵文化財に対する保護思想の普及や県内外への情報発信に努めているところでございます。

このたび平成17年度に、当センターが実施した事業概要を取りまとめた平成17年度年報「愛比売」を刊行することとなりました。本書は、当センターが発掘調査を実施した17遺跡についての概要を中心に1冊にまとめたものです。そのほか、整理・報告書作成事業ならびに発掘調査に伴う現地説明会などの普及事業の概要についてもまとめております。

本書が地域における歴史や考古学研究の資料としてご活用いただき、さらに県民の方々の身近にある埋蔵文化財保護の重要性に対するご理解と地域の歴史への関心に役立つことができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、各事業の実施にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者のみなさまに厚くお礼を申し上げます。

平成18年6月

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター
理事長 野 本 俊 二

目 次

I 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターの概要	1
1 設立趣意書	1
2 沿革	1
3 事務所所在地	1
4 役員名簿	2
5 平成17(2005)年度組織及び職員	2
6 年度事業一覧	3
1.委託事業(寄附行為第4条第1号)	3
2.普及・啓発事業(寄附行為第4条第2号)	3
3.道後公園(湯築城跡)関係事業(寄附行為第4条第4号)	4
II 事業報告	5
1 事業の概要報告	6
2 発掘調査を実施した遺跡の概要	9
1.上分乗安遺跡	11
2.上分西遺跡	13
3.長網遺跡9区	15
4.成福寺3・4号墳	16
5.成福寺VIII遺跡	17
6.朝倉下経田遺跡1次調査区	18
7.高橋佐夜ノ谷遺跡2次	19
8.別名寺谷I遺跡	20
9.別名一本松古墳	22
10.神宮太郎丸遺跡	24
11.馬越和多地遺跡2次	25
12.猿川西ノ森遺跡	26
13.千足遺跡2次調査	27
14.岩倉城跡	28
15.正徳ヶ森城跡	29
16.角ヶ谷城跡	30
17.長松寺城跡	31
3 刊行した報告書の概要	32
4 道後公園(湯築城資料館)	34
1 事業の概要報告	34
2 湯築城資料館利用状況	34
3 国史跡湯築城跡普及啓発事業の概要	34

例 言

- 1 本年報は、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが平成17(2005)年度に実施した業務の記録である。
- 2 概要の記載は発掘調査を実施した遺跡単位とし、東予・中予・南予の順に掲載した。
- 3 遺跡位置図は国土地理院発行25,000分の1地形図を使用した。
- 4 各遺跡の調査期間は現場作業開始から終了までとした。
- 5 各事業・各遺跡の概要の執筆者名は文末に記している。
- 6 概要中の図の略号は次の通りである。
SA：柵列 SB：掘立柱建物跡 SD：溝 SE：井戸 SI：竪穴住居跡 SK：土坑
SP：柱穴・小穴 SR：自然流路 ST：土坑(墳)墓 SU：集石遺構 SX：性格不明遺構
SM：古墳
- 7 本年報の編集は西川真美が行った。

I 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターの概要

1 設立趣意書

文化遺産は、県民が長い歴史の中においてはぐくみ育ててきた貴重な財産であり、この貴重な財産を将来にわたって長く保存し、後世に伝えることは、歴史と風土に根ざした豊かな社会を維持発展させるうえにきわめて重要である。

特に、埋蔵文化財の保護は、我が県の土地開発の発展の中で、今日ますます大きな問題になっている。

当法人は、埋蔵文化財の調査研究を行うとともに埋蔵文化財の保護思想の涵養と普及を図り、地域文化の振興に寄与することを目的として設立するものである。

2 沿革

昭和52(1977)年 5月24日	発起人会議開催される。
5月31日	愛媛県教育委員会へ設立許可申請書を提出する。
6月9日	愛媛県教育委員会から設立許可される。 事務局を松山市堀ノ内官有地(愛媛県立歴史民俗資料館内)に置く。
6月20日	松山地方法務局へ設立登記申請する。
8月8日	第1回理事会を開催する。
12月8日	第1回評議員会を開催する。
昭和53(1978)年 1月1日	調査員2名を採用する。
4月1日	伊予郡砥部町へ整理事務所を借地により開設する。
昭和55(1980)年 4月1日	県から教員が調査員として派遣される。
7月18日	事務局を愛媛県庁第二別館へ移転する。
昭和57(1982)年 8月1日	徽章を制定する。
平成元(1989)年 4月1日	県から担当主任が派遣される。
平成2(1990)年 4月1日	事務局を県庁第一別館へ移転する。
平成3(1991)年 4月1日	温泉郡重信町へ整理事務所を移転する。
平成8(1996)年 3月11日	衣山整理事務所を開設する。
平成9(1997)年 4月1日	組織改正により2課3係を新設し、総務課長、調査課長、調査第一係長、調査第二係長、調査第三係長を置き、県から派遣2名が増員される。
平成12(2000)年 4月1日	衣山整理事務所を閉鎖し、重信整理事務所に統合する。事務局を県庁第二別館に移転する。
平成14(2002)年 4月1日	道後公園(湯築城跡)の管理運営を県から委託される。組織改正により総務課企画普及係を設置、事務局を県庁第一別館に移転する。
平成15(2003)年 4月1日	事務局を愛媛県三番町ビルに移転する。
平成17(2005)年 8月8日	事務局と重信整理事務所を統合し、松山市衣山に移転する。

3 事務所所在地

愛媛県松山市衣山四丁目68番地1

4 役員名簿

平成17(2005)年度

役員	理事長	野本俊二	県教育委員会教育長
	常務理事	天野全二 日野孝雄	(財)県埋蔵文化財調査センター参事(平成17年6月退職) (財)県埋蔵文化財調査センター参事
	理事	下條信行 内田九州男 白石勝也 菅原正夫	県文化財保護審議会委員 県文化財保護審議会委員 県町村会会長 県教育委員会事務局文化スポーツ部長
		森田邦博 土居貴美	愛媛銀行常勤監査役 松山市教育委員会教育長
評議員	赤松 環 赤星皓一 田所清二 保木俊司 池川孝文	県生涯学習センター嘱託研究員 県町村教育長会長 県町村会事務局長 県教育委員会事務局教育総務課長 県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課長	

5 平成17(2005)年度組織及び職員

	参事(兼常務理事)	天野全二(平成17年6月退職)
総務課		日野孝雄
	総務課長	真山 勉
	専門員	田井一政
	主 事	相原正明
	臨時補助員	河野有美 下村 舞 森加代子(平成17年8月退職)
湯築資料館	館長	藤田純隆
	企画普及係長	中圓尾正
	学芸員	松村さを里
	臨時補助員	児玉典子 玉井友子
調査課	調査課長	岡田敏彦
調査第一係	調査第一係長	中野良一
	主任調査員	柴田昌児
	調査員	土井光一郎 三好裕之 山中孝重 中島義人 池内 明
	嘱託員	今泉ゆかり 北山育美 楠真依子 若杉美香 岡美奈子 鎌土奈々(平成17年7月退職)
	臨時調査員	西岡武志
調査第二係	調査第二係長	眞鍋昭文
	主任調査員	多田 仁
	調査員	山内英樹 池尻伸吾 高田明知 和田正人 片岡大介 保氣口勝之 郷田秀和
	嘱託員	藤本清志
	臨時調査員	田中宏幸(平成17年12月退職) 大野由美子
調査第三係	調査第三係長	高橋勸次
	主任調査員	西川真美
	調査員	三好一史 槇光一郎 児島祥之
	嘱託員	柴田圭子 寺嶋信三 平岡孝司

6 年度事業一覧

1. 委託事業（寄附行為第4条第1号）

平成17(2005)年度埋蔵文化財調査事業

委託者	事業名称	面積 (m ²)		金額 (円)	
		発掘	整理		
国土交通省	松山管内	16,590	15,449	229,425,000	
	大洲管内	3,700	1,650	48,300,000	
都市再生機構	今治新都市	4,640	26,200	82,551,000	
西日本高速道路株式会社	四国横断自動車道	6,800	3,300	61,530,000	
愛媛県	今治丹原線ほか	6,610	7,263	152,835,000	
合	計	38,340	53,862	574,641,000	

平成17(2005)年度埋蔵文化財調査(発掘調査)一覧

No.	遺跡名	所在地	調査原因	調査係	所属時期
1	上分乗安遺跡	四国中央市上分町	一般国道11号川之江三島バイパス建設	調査第一係	弥生時代～中世
2	上分西遺跡	四国中央市上分町	一般国道11号川之江三島バイパス建設	調査第一係	縄文時代～中世
3	長網遺跡9区	西条市実報寺	県道孫兵衛作壬生川線建設	調査第三係	古墳時代・中世
4	成福寺3・4号墳	西条市実報寺・楠	県道孫兵衛作壬生川線建設	調査第三係	古墳時代
5	成福寺VIII遺跡	西条市楠	県道孫兵衛作壬生川線建設	調査第三係	縄文時代～古墳時代
6	朝倉下総田遺跡一次調査区	今治市朝倉下	一般国道196号今治道路建設	調査第一係	弥生時代～中世
7	高橋佐夜ノ谷遺跡2次	今治市高橋	県道今治丹原線建設	調査第三係	縄文時代～弥生時代
8	別名寺谷遺跡	今治市別名	今治新都市開発	調査第二係	弥生時代～古代
9	別名一本松古墳	今治市別名	今治新都市開発	調査第二係	古墳時代
10	神宮太郎丸遺跡	今治市神宮	県道今治丹原線建設	調査第三係	弥生時代・中世
11	馬越和多地遺跡2次	今治市馬越ほか	浅川水系日吉川河川改修	調査第三係	中世
12	猿川西ノ森遺跡	松山市猿川	県道北条玉川線整備	調査第三係	縄文時代～中世
13	千足遺跡2区	伊予郡砥部町千足	一般国道33号砥部道路整備	調査第一係	弥生時代・中世
14	岩倉城跡	宇和島市三間町成家	四国横断自動車道建設	調査第二係	中世
15	正徳ヶ森城跡	宇和島市三間町務田	県道広見三間宇和島線整備	調査第二係	中世
16	角ヶ谷城跡	宇和島市三間町務田	県道宇和三間線整備	調査第二係	中世
17	長松寺城跡	宇和島市保田	一般国道56号宇和島道路建設	調査第二係	弥生時代・中世

2. 普及・啓発事業（寄附行為第4条第2号）

特別展

1階展示室で企画展を開催した。

「平成17年度遺跡速報展『いにしへのえひめ '05』」 [平成17年8月23日～11月25日]

「平成17年度後期テーマ展『時代のものさしー旧石器・縄文時代ー』」

[平成17年12月2日～平成18年3月24日]

四国・埋蔵文化財センター巡回展

四国四県と松山市の埋蔵文化財センターが共催し、次の事業を四国内5会場で実施した。

「発掘へんろ遺跡でめぐるー伊予・土佐・讃岐・阿波ー」

愛媛会場：松山市考古館 [平成17年4月23日～平成17年7月3日]

愛媛第二会場：湯築城資料館 [平成17年7月8日～平成17年7月24日]

高知会場：高知県埋蔵文化財センター [平成17年8月1日～平成17年9月30日]

香川会場：香川県歴史博物館 [平成17年12月22日～平成18年2月5日]

徳島会場：徳島県立埋蔵文化財総合センター 〔平成18年2月14日～平成18年3月19日〕

現地説明会

発掘調査を実施した遺跡で遺構・遺物などを一般に公開する現地説明会を平成17年度は下記の4遺跡で開催した。

遺跡名	実施日	場所	参加人数
岩倉城跡	平成17年10月22日	宇和島市三間町	85名
別名一本松古墳・別名寺谷I遺跡	平成17年12月4日	今治市別名	136名
上分西遺跡・上分乗安遺跡	平成17年12月17日	四国中央市上分町	148名
長松寺城跡	平成18年2月25日	宇和島市保田	101名

3.道後公園(湯築城跡)関係事業 (寄附行為第4条第4号)

委託者	事業(業務)名称	金額(円)	備考
愛媛県(土木部)	道後公園管理業務	51,262,890	
愛媛県(教育委員会)	国史跡湯築城跡普及啓発事業	2,106,300	
合計		53,369,190	



発掘へんろ 愛媛第二会場(湯築城資料館)



長松寺城跡 現地説明会

II 事業報告

1 事業の概要報告

調査第一係事業概要

調査第一係の平成17年度事業は、国土交通省の松山管内埋蔵文化財調査で、川之江三島バイパス・新居浜バイパス・小松バイパス・今治道路・松山インター関連・砥部道路の6路線において発掘調査・整理作業・試掘調査を実施した。

[発掘調査]

発掘調査は川之江三島バイパスの上分西遺跡と上分乗安遺跡、今治道路では朝倉下経田遺跡、砥部道路の千足遺跡で実施した。

上分西遺跡は平成14年度から継続して調査が実施されており、上下二面の遺構面からは掘立柱建物や竪穴住居、溝など過年度調査と同様の遺構が検出されている。新しい遺構としては9区で、直径4m前後の不整形形状の集石遺構があり、円礫とともに古墳時代初頭の古式土師器が多量に出土している。当該期の竪穴住居もすでに10棟検出されており、集落景観の復元も可能であろう。

上分乗安遺跡でも上下二面の調査が行われ、竪穴住居・掘立柱建物・柱穴群・土坑・井戸・溝などを検出した。上面からは7世紀後半から8世紀と13世紀前後の鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。円面硯や刀子などが出土していることから識字階層の存在が明らかであり、また土馬の出土から律令的祭祀が行われていたことがわかった。中世では貿易陶磁器なども出土した。柱穴からは土師器皿や和泉型瓦器椀、香川県の西村窯系の椀などが意図的に遺棄されており、柱穴祭祀の一形態がうかがえる。

下面では弥生時代後期後半と7世紀代の遺構が検出された。上分西遺跡も含めた広域の集落景観が復元できるものと期待される。

朝倉下経田遺跡では頓田川の左岸に隣接する緩傾斜地の調査が行われた。遺構面は弥生時代中期末、古代、中世の各時期が部分的に三面確認された。遺構は竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑、柱穴、井戸などで、掘立柱建物には布掘りの形態もあり赤色塗彩土師器の出土もみられることから官的な建物の一部であることも考えられる。中世では主に15世紀から16世紀初頭の時期に盛期があり屋敷地が溝によって区画されており、瓦も少量出土していることから領主層の屋敷か寺院跡の可能性も考えられる。今後、隣接区の調査で明らかになるであろう。

千足遺跡では前年度調査区に連続する2区の調査が行われた。遺構は希薄になっているが、屋敷地区画と考えられる溝が検出されている。独立した単体の区画ではなく区画溝が連続(連結)している状況を呈している。近年の調査でこのような区画溝の検出が多く、類型化するだけの資料が蓄積している。

[試掘調査]

川之江三島バイパスでは、中之庄地区32,050m²の試掘を実施した結果800m²の遺跡が確認された。今治道路では朝倉地区の朝倉下と山口地区において約66,000m²の試掘を実施し、26,200m²の遺跡を確認した。

[整理作業]

新居浜バイパスと砥部道路については本報告書の作成を行った。小松バイパスでは「大久保遺跡E区」「大久保遺跡竹成地区」「大開遺跡」「松ノ丁遺跡」の遺構図作成と原稿執筆を行った。松山インター関連の「北井門遺跡」では遺構図・遺物実測図トレース作業を中心に実施した。

(調査第一係長 中野良一)

調査第二係事業概要

第二係では、都市再生機構2件、国土交通省大洲管内1件、西日本高速道路株式会社(旧日本道路公

団)1件、愛媛県2件の発掘調査と、都市再生機構関連2件、国土交通省大洲管内1件、西日本高速道路株式会社1件、愛媛県2件の整理作業の委託事業を担当した。

[発掘調査]

都市再生機構から委託を受けて実施したのは、今治市別名の別名一本松古墳と別名寺谷I遺跡である。別名一本松古墳は丘陵頂部に造営された全長約30mの前方後円墳で、並列する2基の主体部には青銅鏡が副葬されていた。時期は4世紀末頃と考えられ、今治平野の首長墓の系譜を辿るうえで貴重な資料になるものと評価できる。別名寺谷I遺跡では全国的にも稀少な平地式住居が線刻された弥生時代中期の高杯が出土した。また、古代では鍛冶炉が多数検出されるとともに施釉陶器や青磁・硯・瓦などが出土し、近隣に製鉄炉が存在していた(高橋佐夜ノ谷II遺跡)事実なども考慮すると、この地域に官営の鉄生産工房が存在していた可能性が指摘できる。

西日本高速道路株式会社から委託を受けて実施したのは宇和島市三間町の岩倉城跡である。7ヶ所の郭から建造物13棟・柵列11列・土坑20基・柱穴約900基を検出し、16世紀後半に廃城したことが判明した。

国土交通省から委託を受けて実施したのは宇和島市保田の長松寺城跡である。郭3ヶ所と堀切2基・土塁1基を検出した。今回の調査では従来から知られていた長松寺城跡(B)から東へのびる尾根先端に位置する郭群(A)で、Bが16世紀代と考えられるのに対し、15世紀に遡るものであることが判明した。また、土塁盛土中からは弥生土器や石器が出土し、築城以前には弥生時代の遺跡が存在していたことが明らかとなった。

愛媛県から委託を受けて実施したのは宇和島市三間町の正徳ヶ森城跡と角ヶ谷城跡である。正徳ヶ森城跡では城郭に直接関係する遺構・遺物の発見はなかったが、城が単郭構造で小規模な砦状のものであった可能性が指摘できる。角ヶ谷城跡では、城域の最東端の限られた箇所での調査であったが、版築状の盛土で郭の先端部を三間盆地へ向けて突出させていることが判明した。築城技術や城の機能に関わる貴重な資料と評価できる。

[試掘調査]

宇和島市保田の宇和島道路建設予定地において、27,100m²を対象に試掘調査を実施したが、ほとんどが来村川の氾濫源であり、遺構・遺物ともに検出されなかった。

[整理作業]

各事業とも発掘調査に並行して基礎整理作業を実施した。また、西日本高速道路株式会社関連では平成16年度に西予市宇和町で発掘調査を実施した下川遺跡、愛媛県関係では上述の正徳ヶ森城跡・角ヶ谷城跡について報告書を刊行した。

(調査第二係長 眞鍋昭文)

調査第三係事業概要

平成17年度の調査第三係の担当事業は、愛媛県からの委託事業が4件・7遺跡であった。

[発掘調査]

西条地区では、県道孫兵衛作壬生川線整備事業に伴う調査(長網遺跡9区、成福寺3・4号墳、成福寺VIII遺跡)を実施した。長網遺跡9区では古墳時代後期の集落跡を検出した。この調査区をもって平成11年度から継続してきた長網遺跡の調査は終了する。今後の整理作業では、個々の遺構・遺物を分析し、道前平野北部における古墳時代後期の集落の構成や変遷を明らかにしていきたい。成福寺3・4号墳では、古墳時代中期の円墳を1基検出した。成福寺VIII遺跡では、弥生時代前期の遺構を中心に、縄文時代後期から古墳時代終末期までの遺構・遺物を検出した。特に土坑内からは有柄式

磨製石剣が出土している。

今治地区では県道今治丹原線改築事業に伴う調査(神宮太郎丸遺跡・高橋佐夜ノ谷遺跡2次)、浅川水系日吉川の河川改修工事に伴う調査(馬越和多地遺跡2次)を実施した。神宮太郎丸遺跡では弥生時代終末の土坑、自然流路と中世の掘立柱建物を検出し、報告書にまとめた。高橋佐夜ノ谷遺跡2次は自然流路のみの検出であった。流路からは弥生時代後期の土器を中心に縄文時代後期から古墳時代後期までの土器や石器を多量に検出した。馬越和多地遺跡2次は前年度に引き続いての調査で、12世紀から14世紀にかけての土坑・溝・井戸・柱穴・小穴を検出している。

松山地区では県道北条玉川線整備事業に伴う調査(猿川西ノ森遺跡)を実施した。猿川西ノ森遺跡では縄文時代後期から晩期の遺構および中世の遺構、遺物は縄文時代早期・縄文時代後期から晩期と中世の遺物を検出した。

[整理作業]

各路線共に発掘調査と並行して遺物の洗浄・注記を行い、現地調査完了後は実測・復元等の整理作業を行った。

『神宮太郎丸遺跡—一般県道今治丹原線改築事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ—』の報告書を刊行した。

(調査第三係長 高橋勸次)

普及啓発事業概要

広く県民の方々にセンターの活動内容を知っていただくとともに、愛媛県内の考古学資料の基礎資料として活用されることを期待し、年間の事業概要をまとめた「愛比売—平成16年度年報—」と職員の自己研鑽の調査研究をまとめた「紀要愛媛—第6号—」を刊行した。特に年報は情報の速報性に意義があることから、年末印刷・次年度発送をやめ、5月末に印刷を行い、年報記載の平成16年度報告書とともに発送することとした。

現地説明会は県内4ヶ所で実施し、現地説明会の開催および実施状況・現地説明会資料は随時ホームページ上に掲載している。

考古資料展では昨年度から取り組んでいる四国地区埋蔵文化財センター5団体合同の「発掘へんろ—遺跡でめぐる伊予・土佐・讃岐・阿波—」第二巡目を共催し、湯築城資料館において約2週間ではあったが、愛媛第二会場として「義経とその時代展」を開催した。

今年度は普及啓発事業において記念すべき年度となった。事務所の移転に伴い、展示室を設け、前期・後期の2回の企画展を開催することとなったことである。

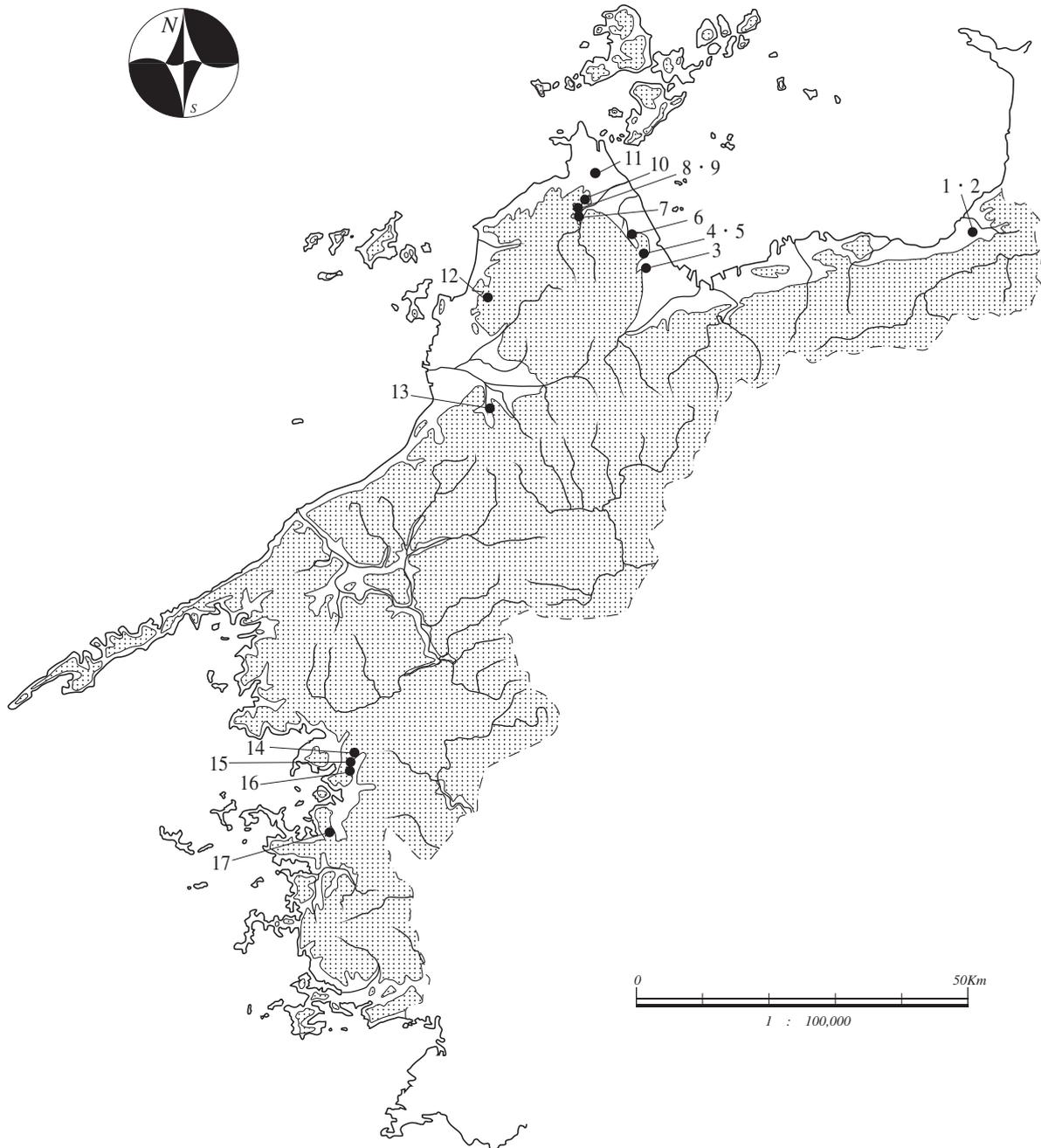
その他では、愛媛県歴史文化博物館・徳島市立考古資料館などの講座へ講師派遣、中学校の生徒の発掘調査現場・整理事務所見学受け入れや県内外の関係機関への調査協力などを通じ、埋蔵文化財の普及啓発に努めた。

(調査課長 岡田敏彦)



遺跡速報展(センター展示室)

2 発掘調査を実施した遺跡の概要



平成17年度埋蔵文化財調査位置図(番号は各遺跡概要に対応)

1.上分乗安遺跡

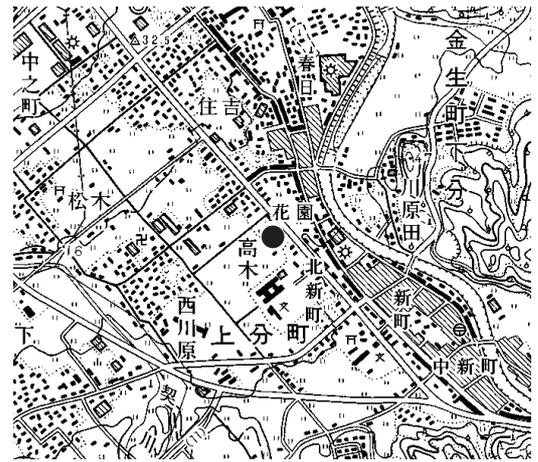
- 1 所在地 四国中央市上分町457～460
- 2 所属時期 弥生時代後期後半～鎌倉時代
- 3 調査期間 平成17(2005)年7月4日
～平成18(2006)3月28日
- 4 調査面積 8,340m²
- 5 調査原因 一般国道11号川之江三島バイパス建設
- 6 担当者 柴田昌兎 池内 明 岡美奈子
西岡武志
- 7 調査概要

愛媛県の東端に位置する四国中央市は、古くからの交通の要衝として知られており、遺跡が所在する宇摩平野東部（旧川之江市域）には、金生川によって形成された扇状地が展開している。上分乗安遺跡は、その西側扇側部に位置し、標高18m前後に立地している。

上分乗安遺跡の発掘調査は、県道川之江大豊線に面した調査区を1区として行った。

上層遺構では堅穴住居11棟・掘立柱建物2棟以上・柱穴群(約800口)・土坑88基・井戸・溝など多量の遺構を検出した。上層遺構では二つの時期の遺構に大別することができる。まず一つが奈良時代を中心に7世紀後半から8世紀にかけての遺構で主に堅穴住居や掘立柱建物が検出され、円面硯や土馬、刀子、土錘などが出土した。もう一つは鎌倉時代を中心とした12世紀後半から13世紀代の遺構で、掘立柱建物の柱穴は約800口に及び、大型の建物を複数復元することができる。また、遺構の中には十瓶窯系須恵質甕が出土した礫敷きの火葬墓も検出されている。各遺構からは比較的多く出土した和泉型瓦器をはじめ、白磁や青磁、青銅製品などが出土している。

下層遺構では堅穴住居8棟以上、そして土坑・溝が検出された。下層遺構でも2つの時期の遺構に大別することができる。一つは上層遺構と連続する時期である7世紀段階を中心とした堅穴住居や土坑・不明遺構で、須恵器や土師器、土錘や鉄器などが出土している。調査区西側で検出された方形堅穴住居SI-208では、良好な残存状態のカマドが検出され、カマド本体には甑と甕が残り、煙道部は土師器甕を連結して構築されていた。もう一つは弥生時代後期後半の遺構で調査区を南北方向に横断する幅約1mの溝であるSD-07をはじめ、堅穴住居や不明遺



位置図



上層遺構配置



調査区全景

構、そして土坑などが検出されている。特にSD-07では大量の弥生土器が廃棄されていた。

本年度の調査では、上層遺構と下層遺構の一部において奈良時代を中心に7世紀から8世紀にかけての竪穴住居や掘立柱建物が検出され、円面硯や土馬、刀子、土錘などが出土している。特に円面硯や刀子の出土は識字階層の存在を裏付けるものであり、愛媛県で5例目となる土馬の出土からは、当該地において律令祭祀を行ったことが想定できる。これらのことから本遺跡では古代宇摩郡との関連が指摘できる官人が居住していた可能性を指摘できる。周辺には太政官道である南海道の推定路線が存在しており、また向山古墳など有力者の存在を示す墳墓も存在することから周辺に古代宇摩郡の官衙関連施設が存在していた可能性を充分指摘することができる。今後の延伸部の調査成果が期待される場所である。残存状況が良好であった方形竪穴住居SI-208の調査はカマドや竪穴住居の構造を知るうえで貴重な資料となる。

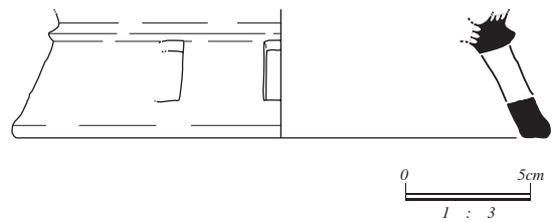
また、鎌倉時代を中心とした12世紀後半から13世紀代の遺構は、掘立柱建物の柱穴が約800口に及んでいることや白磁や青磁、青銅製品なども出土していることから比較的規模の大きい中世集落が展開している可能性が高い。この中世集落は試掘の結果から西側に展開している可能性を指摘されているので、来年度調査予定である2区の調査によってより具体的な内容が判明するものと予想できる。

下層遺構では弥生時代後期後半を中心に遺構が検出され、当該期の集落景観の復元が可能となる成果を上げている。隣接する上分西遺跡の古墳時代初頭集落との有機的関連性が考えられ、これも来年度調査予定である2区の調査によってより具体的な集落景観が判明するものと思われる。

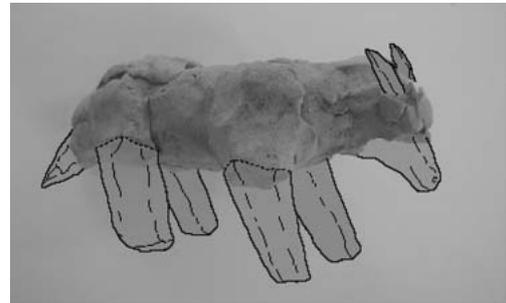
これらの調査成果は上分西遺跡の調査成果も含めて、上分地区の歴史的景観の復元に寄与するだけでなく、古代宇摩郡の実態解明に大きく寄与するものと考えられる。

普及活動として、12月17日(土)に上分乗安遺跡において一般公開を目的とした現地説明会を開催し、悪天候にもかかわらず148名もの一般市民の参加を得ることができた。

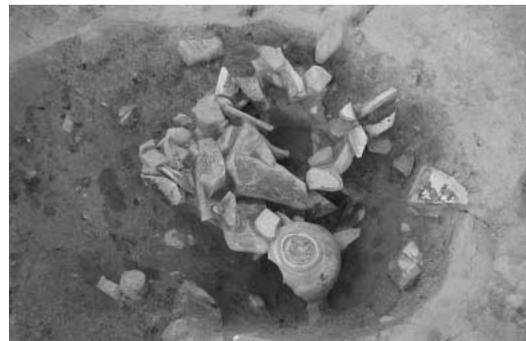
(西岡武志・柴田昌児)



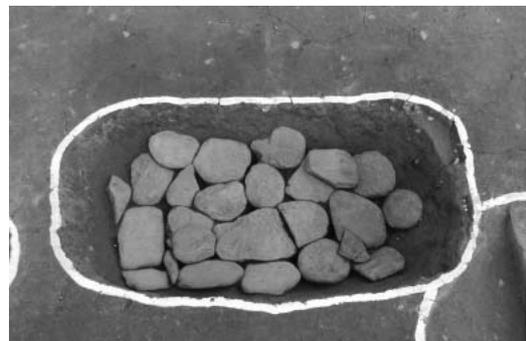
円面硯



土馬



上層 瓦器など中世遺物出土状況



上層 中世墓(礫敷き火葬墓)検出状況



下層 竪穴住居(SI-08)で検出したカマド

2. 上分西遺跡

- 1 所在地 四国中央市上分町423～425
- 2 所属時期 縄文時代後晩期～室町時代
- 3 調査期間 平成17(2005)年4月11日
～平成18(2006)3月28日
- 4 調査面積 2,650m²
- 5 調査原因 一般国道11号川之江三島バイパス建設
- 6 担当者 柴田昌兎 池内 明 岡美奈子
西岡武志
- 7 調査概要

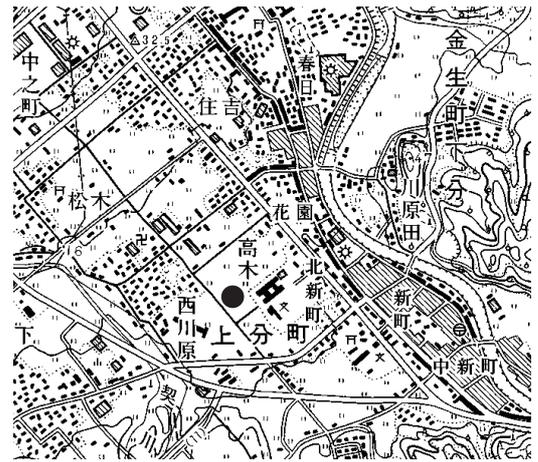
上分乗安遺跡同様、宇摩平野東部（旧川之江市域）に所在する上分西遺跡は、金生川によって形成された扇状地の西側扇側部に位置し、標高17～18mに立地している。

今年度の上分西遺跡の発掘調査は、前年度までに調査が終了した7・8区に隣接した9区と、9区に隣接し調査済である4・8区に接する11区の調査を実施した。

上層遺構では、7・8区から9区、そして11区へと続く浅い溝状遺構が、計10条検出され、それぞれの平面形状は方格状を呈している。昨年度までの調査では水田畦畔の可能性が指摘されていたものの、今回の調査で掘り込みが確認できたことから、畦畔に伴う溝であった可能性が高くなった。これらの遺構からは遺物の出土はなく、時期は不明と言わざるを得ないが、遺構の切り合いから少なくとも15世紀以降の構築であることは間違いない。

また同一遺構面で掘立柱建物3棟が検出されており、その内2棟(SB-02・03)は、8・9・11区に跨る柱穴配置で建物を構成している。SB-01は2間×2間の側柱建物になる掘立柱建物である。出土遺物は僅少で時期の特定には至っていない。SB-02は4間×3間の総柱建物になる掘立柱建物である。隅丸方形の掘り方を持つ柱穴で構成されており、柱穴内より出土した遺物から11世紀頃つまり平安時代末頃の所産と考えられる。SB-03は3間×2間の総柱建物になる掘立柱建物である。明確な掘り方を持たない柱穴で構成されており、柱穴内から出土した遺物から15世紀頃つまり室町時代頃の構築と考えられる。

下層遺構では、自然流路と集石遺構であるSX-01が検出された。自然流路SR-01は最大幅約7mを測り、多少蛇行しながら9・11区を貫流し、7区で検出された流路と繋がる。流路には多量の古式土師器が廃棄されており、銅



位置図



11区上層遺構完掘状況



9区上層遺構SB-01



9区上層遺構SB-02

鍬も出土している。こうした出土状況から古墳時代初頭に大量の廃棄行為で流路が埋まっていることが分かった。その後、流路は幅約1.5～2mの細い溝となっており、古墳時代後期7世紀初め頃の須恵器などが伴う。このことから流路は古墳時代初頭には機能しており、最終的に埋没するのは古墳時代後期であると言える。9区では、その流路の南側肩部付近で直径約4m前後の不整形円形を呈した集石遺構であるSX-01が確認された。また、10区では、その流路の北側に方形の竪穴住居3棟、南側には、8区で検出された竪穴住居(SB-3001)の北東側コーナー部分が検出された。9区で確認された集石遺構は、約20cm前後の円礫を中心にマウンド状に集積しており、集石間には完形に近い古式土師器が多量に廃棄されていた。こうした出土状況は集石と土器廃棄を伴う何らかの祭祀行為が行われた結果と見ることができよう。また、9区調査区の北側には、遺構面形成層上面において層厚10cmほどの縄文時代後晩期の土器が含まれる薄い包含層が検出されている。7区で検出された縄文時代包含層の続きと考えられるが、遺物はあまり含まれていない。

本年度の調査では、上層で、古代・平安時代(11世紀)頃と中世・室町時代(15世紀)頃の掘立柱建物が検出された。昨年度までの調査成果を考慮すると、古代末から中世には、散在的に集落が形成されていた景観を復元することができる。

下層では、古墳時代初頭を中心に遺構が検出された。上分西遺跡の調査区を貫流する自然流路の時期は上述したとおりである。また周辺で検出された竪穴住居は昨年度までの成果を含めると約10棟になり、集石遺構も含めて当該期の集落景観の復元が可能となる成果を上げている。また、縄文時代後晩期の遺物包含層の確認は、昨年度の調査で多量に検出された縄文土器包含層の広がりを検証する資料となる。本年度、遺物の整理作業において縄文土器の復元を実施したが昨年度調査資料には完形に近い資料が含まれていることがわかり、今後の整理作業の進捗によって縄文時代後晩期の基準資料となる可能性が高い。上述した4年にわたる調査成果と隣接する上分乗安遺跡の調査成果を含めると、上分地区の歴史的景観の復元に大きく寄与するものと考えられる。

(西岡武志・柴田昌兎)



11区上層 検出された掘立柱建物と溝



9区下層遺構完掘状況



9区下層 集石遺構(SX-01)



11区下層 SR-01遺物出土状況

ちよあみいせききゆうく

3.長網遺跡9区

- 1 所在地 西条市実報寺甲264-3外
- 2 所属時期 古墳時代・中世
- 3 調査期間 平成17(2005)年9月12日
～平成17(2005)年11月30日
- 4 調査面積 500m²
- 5 調査原因 県道孫兵衛作壬生川線整備
- 6 担当者 榎 光一郎 柴田 圭子
- 7 調査概要

本遺跡は、道前平野北部、大明神川によって形成された扇状地上に立地する。9区は長網遺跡の北端に当たり、これより北は北川に面した低地となる。

本調査区からは、古墳時代後期の竪穴式住居跡2棟と掘立柱建物跡1棟のほか、土坑、溝等を検出した。

SI01・SI02は、竪穴式住居跡である。SI01は調査区中央、SI02は南壁に接して検出した。平面形態は方形で、規模は一辺が6.6～6.8mで、方位は西辺を基準とすると、SI01がN-50° -W、SI02がN-25° -Wである。住居内からは、柱穴と北辺に造り付けられたカマドおよび煙道の一部を検出した。特にSI02のカマドは遺存状態が良好であった。

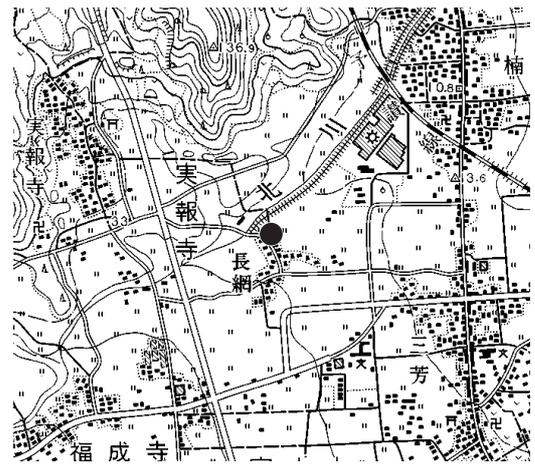
SI02のカマドは、住居北辺のほぼ中央に造り付けられている。平面形は円形で、幅約0.95m、奥行き約0.91m、高さ約0.2mであり、やや西に振って焚き口が設けられている。粘性を帯びた砂質土と粘性の強い焼土の互層によって形成され、内部に多数の土器片を含む。

両住居跡ともに、出土遺物から判断して時期は6世紀後半とみられる。

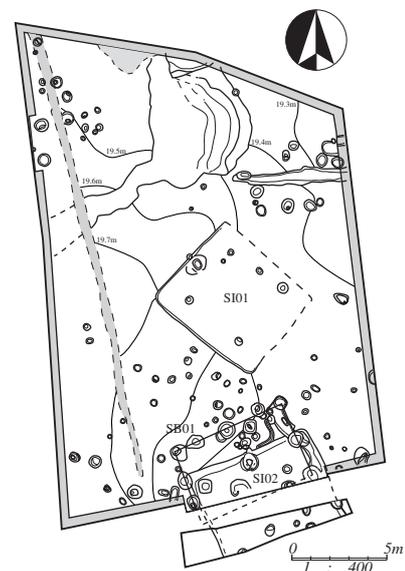
SB01は、SI02の埋没後に建てられた掘立柱建物跡である。規模は、東西2間（約6m）、南北2間（約4.3m）とみられるが、西側は3間の可能性もある。柱穴は径約0.8mと大型であり、柱穴内からは、古墳時代後期、6世紀後半の須恵器が出土し、SI02埋没後さほど時間を経ずに建て替えられたものと推定できる。

本調査区によって、平成11年度から継続してきた長網遺跡の調査は終了した。今後は、道前平野北部における古墳時代後期の代表的な集落として、集落の構成と変遷、住居やカマドの構造、出土遺物の検討等を課題として考察していく必要がある。

(柴田圭子)



位置図



9区遺構配置図



完掘状況(南より)

4. 成福寺3・4号墳

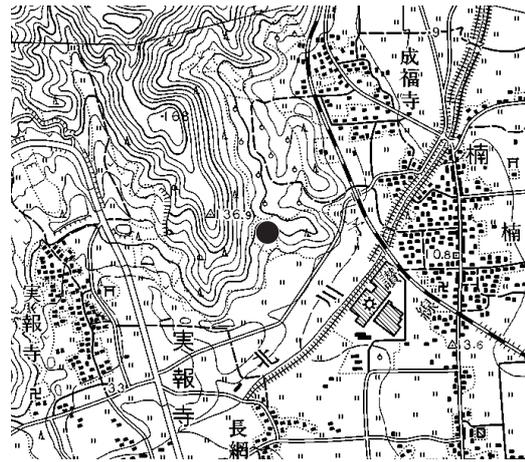
- 1 所在地 西条市実報寺乙406-3外・楠乙12外
- 2 所属時期 古墳時代
- 3 調査期間 平成17(2005)年5月9日
～平成17(2005)年8月25日
- 4 調査面積 800m²
- 5 調査原因 県道孫兵衛作壬生川線整備
- 6 担当者 榎 光一郎 柴田 圭子
- 7 調査概要

本遺跡は、世田山山麓南端の尾根上(標高52～58m)に立地している。調査の結果、調査区南と西端に2基の古墳を検出した。

成福寺3号墳は、残存する墳丘や周溝から方墳と考えられる。墓坑は地山層を掘り下げており、箱式石棺を主体部とする。石棺は、墳丘の北側に構築され、主軸はN-33° -Eである。規模は現存長約1.4m、幅約0.22～0.30mを測る。石材は花崗岩の割石と自然石を用い、蓋石は残存せず、側石も左右1つずつ抜き取られている。側石と掘り方の間には粘土を裏込めとし、石棺内床面にも粘土の貼込みが認められた。遺物は石棺上面を覆う腐植土層直下から鉄片が1点、また、周溝から土師器の細片が1点出土したが、時期は特定できない。

成福寺4号墳は、直径約10～14mの円墳である。南北の裾は削平されているが、東西の周溝と主体部を検出した。墳丘は、小尾根を利用し、地山整形で築かれている。周溝は、幅0.4～2.2m、深さ0.5mで全周しており、西側に幅約3.2mの陸橋部とみられる張り出しが認められる。周溝内には花崗岩垂角礫が転落しており、墳丘裾部に葦石があったと考えられる。主体部は土坑墓で、墳丘中央やや東寄りに検出した。平面形は隅丸方形で、規模は南北約2.2m、東西約1.8m、深さ約0.95mである。西・南側はほぼ垂直に掘り込まれ、東・北側は緩やかな傾斜をもつ。墓坑内の堆積の状況から、墓坑中央中位に棺が埋設された可能性が高い。遺物は、周溝内より礫と土師器の広口壺と鉢が出土し、葦石か墳丘上に供献されていたものとみられる。時期は、古墳時代前半期と考えられる。

道前平野北部においては、中期古墳の調査例は少なく、立地、墳丘形態、主体部、供献土器等貴重な資料を提供できるものとする。(柴田圭子)



位置図



3号墳全景



4号墳全景

5.成福寺VIII遺跡

- 1 所在地 西条市楠甲1571外
- 2 所属時期 縄文時代～古墳時代
- 3 調査期間 平成17(2005)年12月1日
～平成18(2006)年2月13日
- 4 調査面積 800m²
- 5 調査原因 県道孫兵衛作壬生川線整備
- 6 担当者 榎 光一郎 柴田 圭子
- 7 調査概要

本遺跡は、世田山から道前平野にむけて延びる尾根の東側丘陵先端付近(標高27m)に立地している。

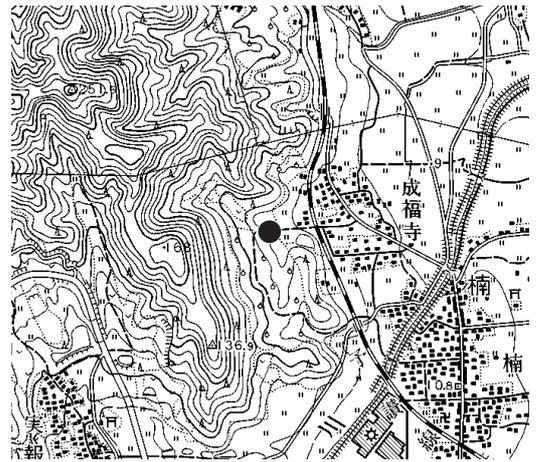
調査は、農業用通路を挟み調査区を2つに分けて実施した。その結果、弥生時代前期の遺構を中心とし、縄文時代後期から古墳時代終末期までの複合遺跡であることが判明した。

1区は、柱穴26口と性格不明遺構1基を検出した。遺構からは土器・石器等が出土したが、細片であり、時期は特定できない。また、建物等が復元できる柱穴の配置もなかった。

2区は、掘立柱建物跡1棟を含む柱穴63穴、土坑12基、溝2条、性格不明遺構2基を検出した。弥生時代前期の溝(SD02)、土坑(SK04・09)から遺物がまとめて出土した。SD02は、調査区北側西寄りで見出し、南北5.5m、幅0.9m、深さ0.24mの溝である。SK04は調査区北側、SK09は調査区中央で見出し、平面形は隅丸長方形で、床面をほぼ水平に整えている。規模はSK04が南北1.7m、東西1.45m、最深部が0.51m、SK09が南北1.8m、東西1.7m、最深部が0.33mである。両土坑は、形態・規模が類似しており、同様の用途をもつものと推定できる。遺構からは、口頸部に段を有する壺、口縁部内面に貼付突帯文を施す壺、如意形口縁の甕などが出土している。また、SK03は、SK04西側で見出した土坑で、平面形はやや不整な楕円形、規模は東西1.1m、南北0.8m、深さ0.12mである。当遺構からは磨製石剣が出土した。石剣は頁岩製で、遺構の時期や石材などから有柄式磨製石剣の系譜と推定される。

当地域においては、弥生時代前期の遺跡は知られておらず、本遺跡の調査が研究の嚆矢として位置づけられる。

(柴田圭子)



位置図



完掘状況



SD02遺物出土状況



石剣出土状況

あさくらしも きょうでんいせきいちじちようさく
6. 朝倉下 経田遺跡1次調査区

- 1 所在地 今治市朝倉下甲383
- 2 所属時期 弥生時代中期末～中世
- 3 調査期間 平成17(2005)年9月6日
～平成18(2006)年3月24日
- 4 調査面積 5,000m²
- 5 調査原因 一般国道196号今治道路建設
- 6 担当者 土井光一郎 中島義人
- 7 調査概要

本遺跡は南に鷹取山、東に笠松山、北に霊仙山に囲まれた朝倉谷のほぼ中央部に位置し、朝倉谷を貫流する頓田川中流域の左岸に展開する複合扇状地と旧自然堤防上(標高31～32m)に立地している。

検出された遺構は掘立柱建物5棟、竪穴住居2棟、土坑184基、溝47条、性格不明遺構40基、柱穴2600口、杭跡1500口である。

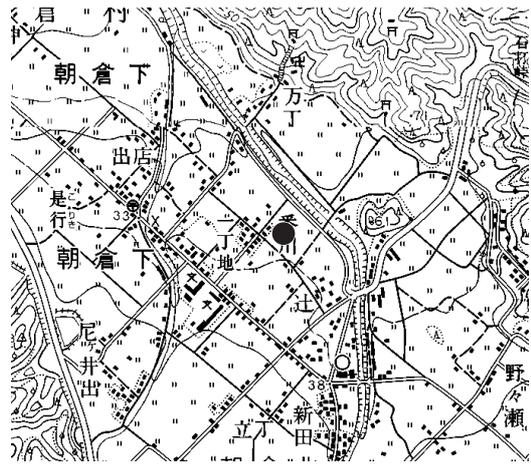
出土遺物の年代観から弥生時代中期末、古代、中世の3時期の遺構が検出されている。なかでも中世の遺構では多数の柱穴と袋状土坑などがみられ、埋土から瓦器椀片や土師器杯・皿、輸入陶磁器が出土している。他に土師器の釜や鍋、備前焼甕やすり鉢、常滑焼の甕等も出土している。また、「コ」字型に巡る区画溝も検出されている。これら遺構の時期は大きく2時期に分かれ、14世紀初頭前後と15～16世紀とみられ、領主層の屋敷やわずかに瓦が出土していることから、寺院跡なども考慮に入れて解釈する必要がある。

古代では5棟の掘立柱建物が検出された。2間×3間の建物や布掘の柱穴もみられる。これらの遺構は調査区外の南に大きく展開していることが推察でき、調査区内の遺構は建物群の北東部にあたる。出土遺物では赤色塗彩土器や円面硯等があり、官的な性格を有した遺構が広がっている可能性が考えられる。

弥生時代の遺構は掘り込みが浅く、プランが明瞭でないが、直径約5mと8mの円形を呈する竪穴住居が2棟検出された。出土遺物は甕や高杯等で、弥生時代中期末の年代である。

当地は過去に調査された実績が無く、遺跡の広がりでは空白地であったが、今回の調査によって良好な遺跡が広範囲に遺存していることが明らかとなった。

(土井光一郎)



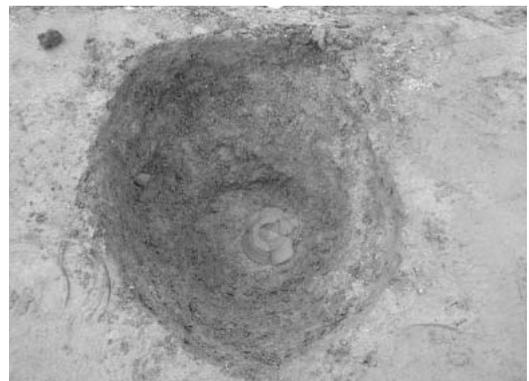
位置図



A区 遠景



SP02土層堆積



柱穴内遺物出土状況

たかはしさやのたにいせきにじ

7. 高橋佐夜ノ谷遺跡2次

- 1 所在地 今治市高橋甲1274-1外
- 2 所属時期 縄文時代・弥生時代
- 3 調査期間 平成17(2005)年9月12日
～平成17(2005)年11月30日
- 4 調査面積 1,460m²
- 5 調査原因 県道今治丹原線道路改良事業
- 6 担当者 西川真美 三好一史
- 7 調査概要

本遺跡は今治平野の南西部に広がる日高丘陵に形成された開析谷(標高21m)に立地している。調査区の南の多々羅という地名が示すとおり、調査区の西隣では古代の製鉄炉が検出されている。

調査は北から5つの調査区(1～5区)を設定し、平成17年度にはその内の1～3区を調査した。

調査の結果、耕作土の下には粗砂・細砂・シルト・粘土などの河川堆積物が厚く堆積し、表土下1.7mより自然流路7条が検出された。地形は北東から南西に向かい傾斜しており、流路は地形に沿って大きく蛇行して流れている。

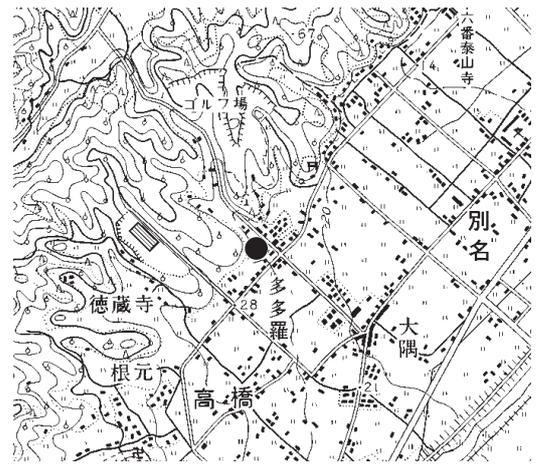
1区では調査区の北側をSR1が流れ、東西を指向するSR3に切られる。SR2は調査区の南側を北西から南に向かい大きくカーブを描く。南東側は後世の水田開墾により攪乱されている。SR4は調査区中央の西壁に僅かに残るのみである。2区のSR5は調査区の西側を南北に指向し、3区ではSR6・7が東西に指向して流れる。

自然流路からは、縄文時代後期～古墳時代後期までの各時代の遺物が出土しているが、特に弥生時代中期末～後期初頭の土器が多量に出土している。1区のSR1および2区のSR5からは完形品の壺が数点出土しており、SR1の壺の体部や底部には焼成後穿孔が確認できる。SR5からは土器のほかにも木製容器(クスノキ材)が出土している。

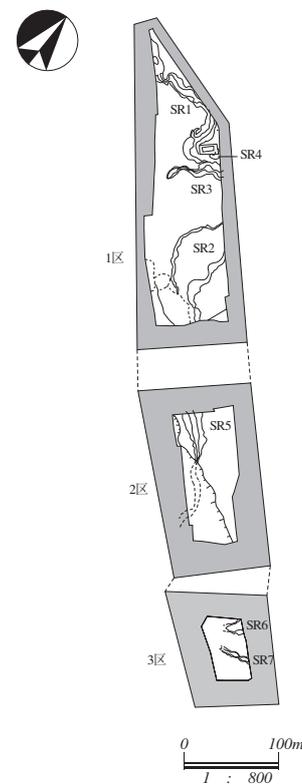
本調査区からは、遺物は多量に出土したが、生活関連の遺構は検出されていない。調査区の西に広がる丘陵頂部や斜面部には、弥生時代中期後半を中心とする丘陵性集落の存在(高橋佐夜ノ谷遺跡:今治新都市事業平成15年発掘調査)が確認されており、集落の本体は丘陵部高位に存在することが窺える。

そのほかにも1区のSR2からは、旧石器時代の角錐状石器が出土している。

(西川真美)



位置図



遺構配置図



SR5遺物出土状況

8.別名寺谷I遺跡

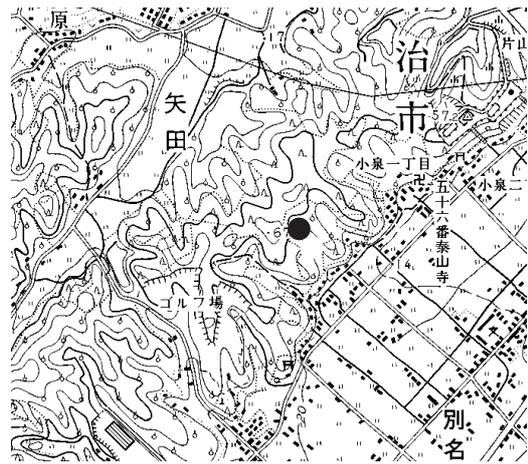
- 1 所在地 今治市別名820外
- 2 所属時期 弥生時代後期～古代
- 3 調査期間 平成17(2005)年10月1日
～平成17(2005)年11月30日
- 4 調査面積 1,200m²
- 5 調査原因 今治新都市開発
- 6 担当者 山内英樹 保氣口勝之
- 7 調査概要

本遺跡は、今治平野北西部に位置する低丘陵で挟まれた開析谷の最奥部に位置している。隣接する北側の開析谷には、古代の鍛冶炉や銅印・円面硯などの遺物が出土した別名端谷I遺跡が所在する。

今回の調査では、昨年度に調査を実施した箇所(1・2区)を除く谷中央部の農道部分(4区)と、遺跡の広がり確認された谷奥部(3区)の発掘調査を実施し、主として弥生時代後期から古代にかけての遺構を検出した。

3区では、谷中央部よりかけ上がりの緩斜面で、柱穴9口、竪穴住居跡3棟、溝状遺構2条、土坑1基を検出した。竪穴住居跡とした段状の遺構は、床面などの遺存状態は悪く、住居に関連する柱穴も確認できなかったが、遺構から出土した遺物の中に、須恵器や移動式カマドなどが確認されているため、居住機能を有する施設ではないかと考えられる。また、斜面下方で検出された柱穴は、昨年度の調査で検出された柱穴群と配置などが密接に結びついているため、大型の掘立柱建物が存在していた可能性がある。3区の出土遺物は全体的に少なかったが、包含層および遺構内から弥生土器・須恵器・土師器などが出土している。

4区では、主に古代(8～10世紀)を中心とする遺構面を2面確認した。第1遺構面では、柱穴39穴、土坑2基、井戸1基のほか、鍛冶炉10基を検出した。各柱穴は直線上に並ぶものが多く、調査区南側では、2間×3間の掘立柱建物を1棟復元することができた。桁部分にあたる柱穴には、南側にもう一列重複する柱穴が確認され、切り合い関係および根石・礎盤の状況から、ほぼ同じ位置で建て替えが行われたものと推察できる。鍛冶炉については、昨年度検出した炉と同様に炉周囲に関連する構造物の遺



位置図



3区・S103土層堆積



3区完掘状況

存はみられない。検出面では、平面形が直径約40cm程の不整形な円形で、高温による熱処理により生じた赤茶や黄に変色硬化した酸化部分と青灰色の還元部分を確認することができた。また、鍛冶炉の中には近接して存在するものがあり、検出された面により高低差が認められ、その高低差を示す間の層には灰や炭化物が含まれているため、ある一定期間継続的に操業されていた可能性が強い。調査区南隅では、須恵器や土師器をはじめ、黒色土器碗や緑釉陶器、瓦等の多様な遺物が見られる土器溜まりを確認した。

その他の遺物として注目されるのは、須恵器蓋の転用硯や、底部外面に墨書のある土師器杯等の文字関連資料や、鞆羽口等の鍛冶関連遺物の出土も認められた。

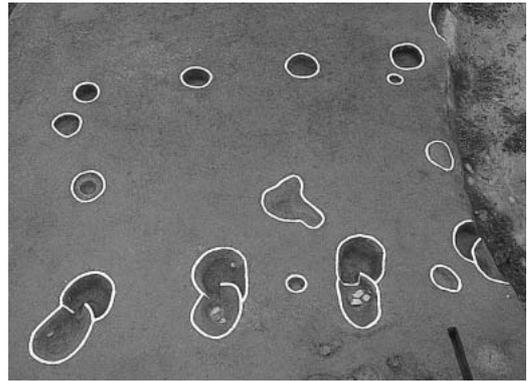
第2遺構面は、検出された遺構が柱穴7口のみであり、出土遺物も第1遺構面と比べると非常に少ない。しかし、包含層からは古代の遺物に加え、丘陵上部からの転落と考えられる弥生土器片が確認されている。

その他、本遺跡の出土遺物で特に注目されるのは、弥生時代中期後半に該当する絵画土器である。高杯脚柱部に線刻で2棟の建物が描かれ、そのうち1棟は壁のある平地式建物を表現しているものと考えられる。壁が表現されている建物の線刻画は、全国的にも大変珍しいものであり、当時の建物の具体像を復元する上で貴重な資料である。

最後に、昨年度の調査成果を踏まえ、本遺跡の性格について簡単にまとめたい。本年度の調査では、2区でも確認された小型鍛冶炉のほか、鍛冶に関わる工房もしくは官的施設の可能性が考えられる掘立柱建物が確認されている。出土遺物には当時の高級品(嗜好品)である施釉陶器のほか、瓦や文字関連遺物等のように、識字能力を有する上位階層の存在が伺える。また、本遺跡の所在する「別名」という地名も、遺構の性格および別名地区の遺跡の展開と併せて興味深い。

今後は、平野中央部に所在すると考えられる国府や国衙関連施設、さらには近年製鉄炉の発見された高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡との関連性の中で、本遺跡の担う役割について様々な角度から慎重に検討していくことが肝要であろう。

(保氣口勝之・山内英樹)



4区掘立柱建物



4区・鍛冶炉1断面



絵画土器

9.別名一本松古墳

- 1 所在地 今治市別名935-4外
- 2 所属時期 古墳時代前期
- 3 調査期間 平成17(2005)年7月1日
～平成17(2005)年9月30日
- 4 調査面積 1,700m²
- 5 調査原因 今治新都市開発
- 6 担当者 山内英樹 大野由美子
- 7 調査概要

本古墳は、今治平野北西部に位置する、標高約65mの低丘陵頂部に位置する。周囲には別名端谷I遺跡・別名寺谷I遺跡をはじめとする弥生時代から古代にかけての集落および墳墓が展開する。これまでに今治市教育委員会の試掘調査で銅鏡2面・鉄剣等の副葬品が出土しており調査区南東側の円丘部は古墳として周知されていた。

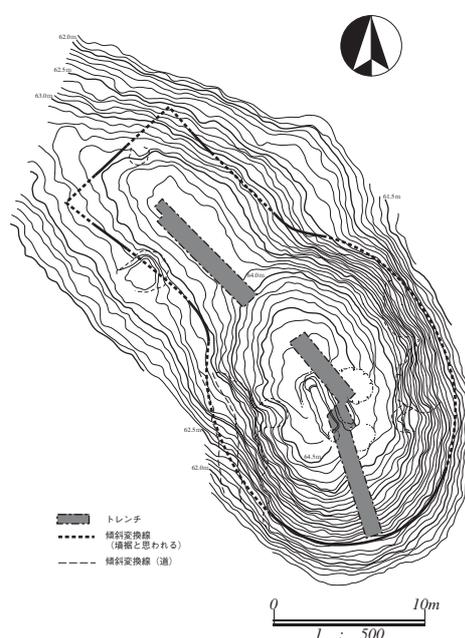
墳丘は、後世の削平によりその形状を一部失っており、調査前測量の段階では、墳丘形状の判断は極めて困難であったが、その後のトレンチおよび流土・包含層剥ぎ取り作業により、墳丘の大半は地山整形で築かれていることが確認された。また、調査区南東側の墳丘では、部分的ではあるが傾斜変換点も確認でき、墳端の平面形は楕円形を呈していると考えられる。調査区北西側の尾根頂部は、傾斜変換点がやや不明瞭であるが、上面に平坦面が認められる点や、くびれ部の存在等を積極的に捉えると、墳長約30mの前方後円墳である可能性が高い。

墳丘盛土は、主に調査区南東側の円丘部で見られるものの、近世以降の墓地設置や後世の攪乱により、現状では頂上部のわずかな箇所ではしか確認されない。本来は後述する墓壙との関係を考慮すると、一定量の盛土が施されていたものと推測される。

埋葬主体は調査区南東側の円丘部に2基確認している。いずれも二段墓壙で、掘方の平面形は、近世(近代?)墓や墓地に伴う整地等により、上部では本来の形状を把握できなかったが、現状では推定長4m以上の隅丸長方形の墓壙で、主体部2基がやや時間差を持ちながら並列して埋葬されたものとする。また、木棺の痕跡は明瞭に確認できなかったが、床面が比較的平らである点などから、組み合わせ式木棺の可能性が考えられる。第2主体部に



位置図



遺構配置図



調査後全景

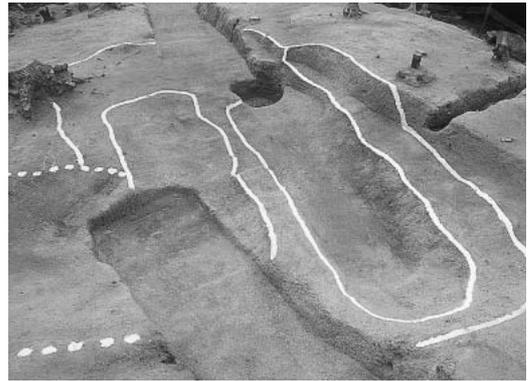
は墓壙底が一段高く作られた部分があるが、これは第1主体部での古式土師器の出土状況からみて、土器を供献する空間として利用されていたのではないかと思われる。埋葬主体に粘土は用いられず、床面全体には赤色顔料の塗布が認められる(ただし、第1主体部および第2主体部の一部は、今治市教育委員会の試掘調査により消失しているため、不明な部分が多い)。

主体部からの出土遺物としては、今治市教育委員会の試掘調査の成果とあわせると、第1主体部からは神獸鏡1面、鉄剣、土師器壺、ガラス小玉6点が、第2主体部からは内行花文鏡1面、鉄剣、不明鉄器、ガラス小玉30点以上、緑色凝灰岩製の管玉4点などが出土している。遺物は南側に銅鏡・鉄製品、中央部両脇に玉製品を配置する様子が認められ、これらの副葬品配置から考えて、頭位は南東を指向していたものと考えられる。

以上の調査成果より、本古墳は古墳時代前期(4世紀後半～5世紀初頭)の首長墳として築造された可能性が高く、墳丘形態についても、くびれ形状や調査区北西側の墳端がやや不明瞭ではあるが、地方における前方後円墳の一形態として注目される。また、本時期は県内でも古墳築造の実態が不明な部分が多いため、今後、周辺地域での調査成果と併せて、更なる検討を行う必要があるものと考えられる。

普及活動としては、12月4日(日)に一般公開を目的とした現地説明会を開催し、悪天候にもかかわらず136名もの一般市民の参加を得ることができた。

(山内英樹)



主体部完掘



第2主体部・鉄製品出土状況



第2主体部・玉製品出土状況

10.神宮太郎丸遺跡

- 1 所在地 今治市神宮671-3外
- 2 所属時期 弥生時代・中世
- 3 調査期間 平成17(2005)年4月11日
～平成17(2005)年5月20日
- 4 調査面積 520m²
- 5 調査原因 県道今治丹原線道路改築事業
- 6 担当者 西川真美 三好一史
- 7 調査概要

本遺跡は今治平野の西に広がる丘陵の裾部に位置する。周辺には小河川による開析谷が点在し、舌状の小丘陵と小枝谷が入り組む複雑な地形を示している。調査は工事の関係により年度をまたいで2度行われた。

調査の結果、弥生時代終末期の土坑1基・自然流路1条と中世の掘立柱建物1棟と溝1条・自然流路1条・柱穴・小穴9口を検出した。また、包含層資料ではあるが、縄文時代後期、縄文時代晩期、古代の遺物も出土した。

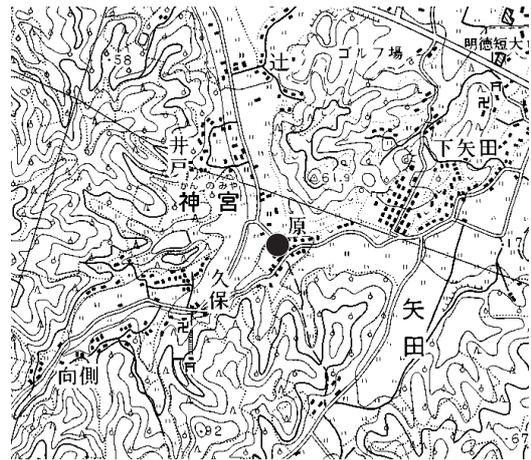
弥生時代終末期の自然流路からは、遺存状態の良い甕や石皿が出土している。これらの遺物は廃棄された際の原因位置を保っているものと考えられる。

掘立柱建物は、建物を構成する柱穴が調査区外に広がるため、全容は確定できないが、1間×2間以上の建物跡と考えられる。掘立柱建物に直接関係する遺物は無かったが、周辺の遺構内より瓦器や土師器の土器片が出土していることから、中世の遺構と考えられる。

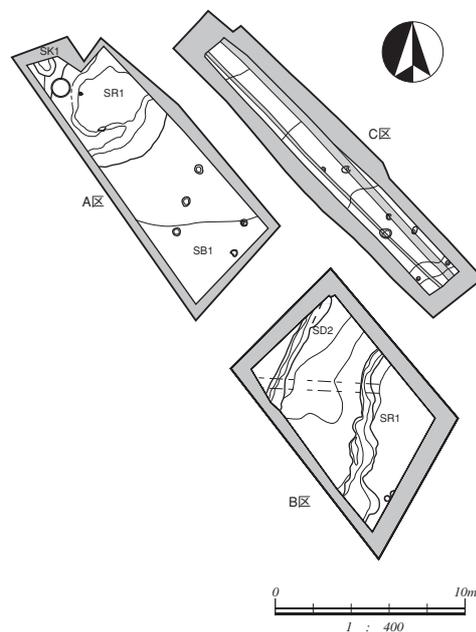
縄文土器は磨消縄文土器や巻貝条痕あるいはナデ地に沈線文のみで文様を構成する沈線文系土器の浅鉢や深鉢で、土器の特徴から縄文時代後期前葉から中葉段階のものと考えられる。

また、遺構は確認できなかったが、中世段階に埋没したと考えられる自然流路より、黒色土器A類の高台付きの皿が出土している。おおよそ10世紀後半(古代末)に想定されるものと考えられる。

(西川真美)



位置図



遺構配置図



SB1

うまごえわだちいせきにじ

11.馬越和多地遺跡2次

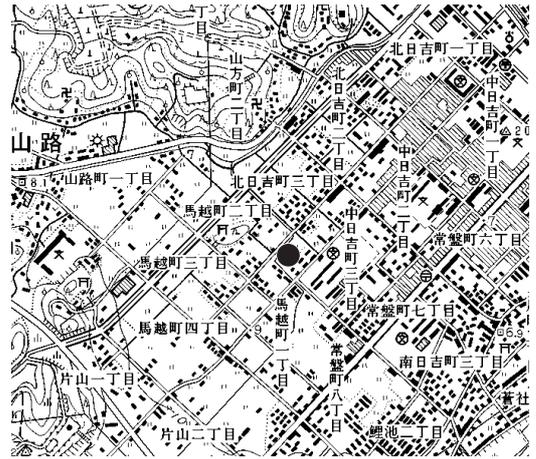
- 1 所在地 今治市馬越二丁目、北日吉町三丁目
- 2 所属時期 中世
- 3 調査期間 平成17(2005)年7月11日
～平成17(2005)年11月25日
- 4 調査面積 1,650m²
- 5 調査原因 浅川水系日吉川河川改修工事
- 6 担当者 高橋歆次 寺嶋信三
- 7 調査概要

本遺跡は、浅川・蒼社川・頓田川の主要三河川によって形成された今治平野の北西に位置する。浅川の支流である日吉川は、源を別名に発し北東へ流れた後、馬越町で北西へ向きを変え、鯨山の独立丘陵を巡って浅川に合流する。遺跡の周辺には県史跡である「鯨山古墳」や中世の遺物・遺構を検出した「馬越和多地遺跡」(1次調査1999、今治市教育委員会)がある。

今回の調査は、昨年度の2・3区に引き続き、1・4～5区の発掘調査を実施した。1区は北西-南東方向に長辺をとる四角形で、4・5区は日吉川を挟んで3区の南側に位置する。

調査では12世紀～14世紀の遺構・遺物を検出した。検出遺構は1区が土坑2基・溝3条・井戸1基・柱穴126口・自然流路1条、4区が土坑2基・溝9条・井戸3基・柱穴56口・自然流路1条、5区が土坑6基・溝10条・井戸1基・柱穴30穴・不明遺構1・自然流路1条である。4・5区で検出した溝は、そのほとんどが方位を同じくする区画溝と考えられる。井戸は、石組みが1基、上部が素掘りで下部が四方を木枠で囲んでいるものが2基、上部が石組みで下部が四方を木枠で囲んでいるものが1基、廃棄が1基であった。廃棄の井戸以外は、いずれも曲物が捉えられていた。遺物は多量の土師器や瓦器のほかにも須恵器や陶磁器・木器などが出土している。

「馬越」という地名の由来は、以前この辺りが遠浅の海で、馬でも越えられるということからきており、昔は人は住めなかったと地域の人々は話す。しかし、今回の調査によって、12世紀～14世紀には、鯨山丘陵の東側は集落の存在が想定でき、今後は各遺構の詳細な時期と変遷、周辺地形の中での空間的位置を明らかにし、当時の景観復元の一資料とする必要がある。(寺嶋信三)



位置図



SE1(1区)



4区完掘



5区完掘

さるかわにしのもりいせき

12. 猿川西ノ森遺跡

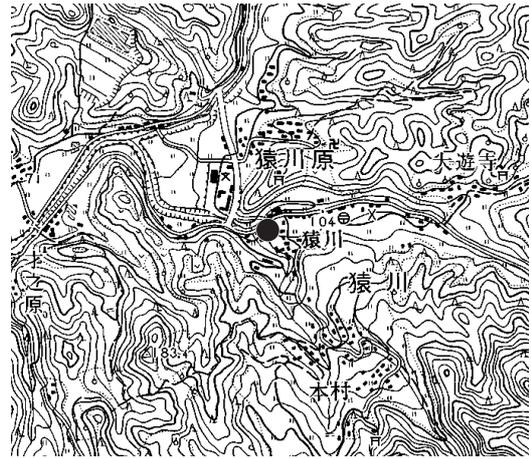
- 1 所在地 松山市猿川甲731-5
- 2 所属時期 縄文時代早期～中世
- 3 調査期間 平成17(2005)年8月22日
～平成17(2005)年11月30日
- 4 調査面積 500m²
- 5 調査原因 県道北条玉川線整備
- 6 担当者 児島祥之 平岡孝司
- 7 調査概要

遺跡は、旧北条市内を流れる立岩川中流左岸の河岸段丘上(標高約106～108m)に位置する。今回の調査は、前年度に引き続き、5区を実施した。

調査は、まず機械で整地層(マサ土)を除去するところより行った。基本層序は、I層からVII層である。I層が旧耕作土層、II層は旧耕作土の整地層である。III層は、黒褐色細礫混じり土の中世の遺物包含層、IV層は褐色細礫混じり粘質土で、縄文時代後期から晩期の遺物包含層である。V層は中礫等の土砂の流出により形成された層で、調査区の東部にだけ存在する。そしてVI層が縄文時代早期の土器が出土した層で、その直上が縄文時代後期から晩期の遺構面である。最後にVII層が中・大礫を含む層で、無遺物であることから基底層と判断した。

調査の結果、縄文時代早期から中世の遺物・遺構を検出した。まず縄文時代早期では、押型文土器が出土したが、遺構は確認できなかった。縄文時代後期から晩期では、土器、サヌカイト・黒曜石の剥片などが出土、遺構は柱穴、土坑を検出した。最後に中世では、土師質土器、瓦器、青磁、備前焼、銭などが出土、遺構は柱穴、杭跡を検出したが、それらに規則的な配列は認められなかった。そのほかに性格不明遺構を検出した。

今回の調査では、15・16年度までと同様の遺構・遺物を検出したことから、本遺跡の周辺には、縄文時代早期から中世の遺跡が広がっている可能性が考えられる。縄文時代では早期の押型文土器が出土したこと、中世では青磁、備前焼、銭などの遺物や、形状がほぼ同一の性格不明遺構が検出されたことなどを重視しながら、今後は類例を調べるとともに、旧地形などを考慮して十分な検討を進め、本遺跡および周辺地域の、縄文時代と中世の生活環境を考えていく必要がある。(平岡孝司)



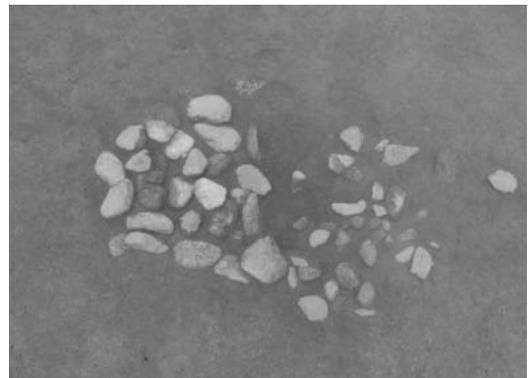
位置図



調査区遠景



縄文時代早期 遺物出土状況



集石遺構

せんぞくいせきにじちょうさ

13. 千足遺跡2次調査

- 1 所在地 伊予郡砥部町千足211-2外
- 2 所属時期 弥生時代中期・中世
- 3 調査期間 平成17(2005)年6月6日
～平成17(2005)年9月2日
- 4 調査面積 600m²
- 5 調査原因 一般国道33号砥部道路整備
- 6 担当者 三好裕之 北山育美
- 7 調査概要

本遺跡は、砥部町内を流れる砥部川右岸の河岸段丘上(標高76～77m)に位置する。今回の調査は、前年度の1次調査に引き続き北側の2区の調査を行った。

遺構の遺存状況は比較的良好で、1次調査のものと併せると、掘立柱建物4棟・土坑51基・溝11条・石列1条・自然流路1条・柱穴及び小穴871口・不明遺構2基を検出した。

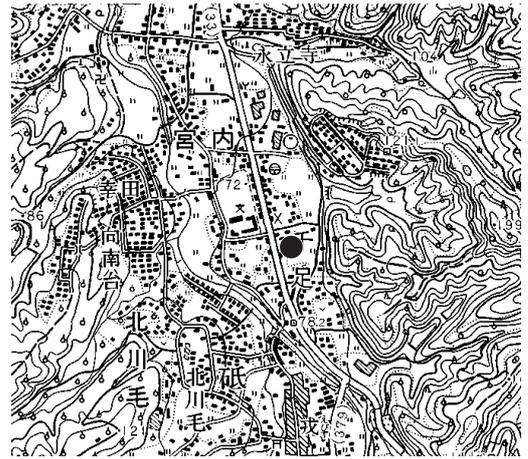
1区北側から2区で検出した溝SD002と2区北側で検出した溝SD010を堆積状況及び位置関係から同一の溝とすると、南北に長さ約56mを測り、おおよそ半町の規模がある。さらに、その半分の約28m付近には両側を溝で区画した幅約2mの道路状遺構と思われる遺構が西へ延びており、SD002及びSD010は区画溝の可能性が考えられる。

出土遺物は、ほとんどが13世紀末～14世紀中葉の遺物である。煮沸具である土釜や土鍋と比較して、供膳具である土師器杯・皿が約8割を占めている。このことから本遺跡は、一般的な生活を営む集落ではないことが想定できる。

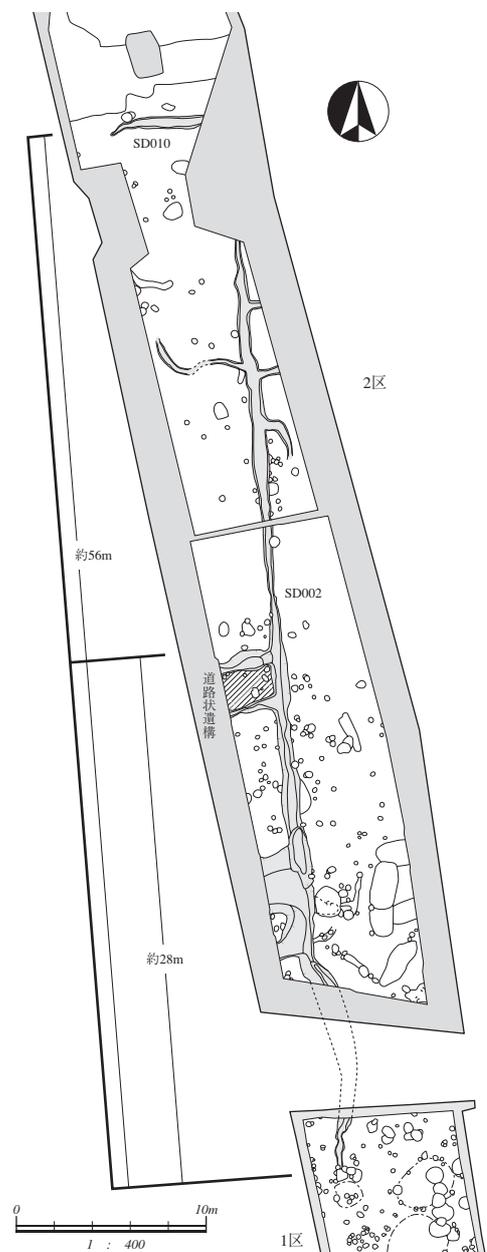
そのほかの遺構として、土坑SK047からは弥生時代中期の土器底部及び土器片が人頭大の礫とともに出土している。ただ、弥生土器が出土したのはこの遺構だけで、周辺にも弥生時代中期の遺跡の報告はない。今後の周辺の調査により評価する必要がある。

以上、2度の調査成果を踏まえ、砥部町川登付近を拠点とし、千里城を本城とする鎌倉幕府御家人であった大森氏が「承久の乱」(1221年)の功により千足地域を与えられ所領していたとされる歴史的な背景から千足遺跡を評価すると、13世紀末から14世紀中葉に大森氏に関する人物の居館が当調査地にあった可能性が考えられる。

(三好裕之)



位置図



遺構配置図

いわくらじょうあと

14. 岩倉城跡

- 1 所在地 宇和島市三間町成家282外
- 2 所属時期 中世
- 3 調査期間 平成17(2005)年4月18日
～平成17(2005)年10月31日
- 4 調査面積 6,800m²
- 5 調査原因 四国横断自動車道(三間～宇和間)建設
- 6 担当者 多田仁 郷田秀和
- 7 調査概要

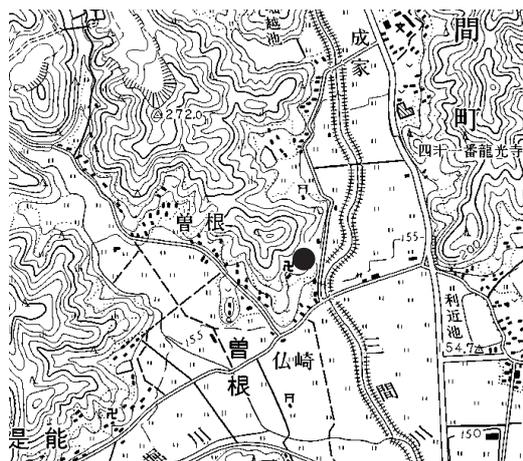
岩倉城跡は宇和島市三間町(旧北宇和郡三間町)西部に位置している。岩倉城は標高約220m(比高約70m)上に第1主郭が位置する山城で、丘陵の北西・北東・南東麓に向かって郭が展開していることが確認されている。『清良記』や『吉田古記』の記述によると、この城は中世後期に三間西部を支配した今城氏の持ち城の一つで、彼の旗下にあたる松浦将監が城主であったといわれている。

調査の結果、郭が7面確認され、建造物13棟、柵列11基、土坑約20基、柱穴約900穴が検出された。郭のうち5ヶ所は、発掘調査によって新たに確認されたものである。最も多く遺構が検出したのは、調査区南端にある低位の郭で、検出面積920m²に全検出数の70%にあたる約650口の柱穴、建造物9棟、柵列5基が確認された。出土遺物は土師器の坏・皿、備前焼の甕・播鉢、青磁、土鍋、瓦質土器、永楽銭、砥石、青花といった中世のもので、特に青花の万頭心碗が南端の郭で出土しており、南東部の郭が16世紀第3四半期まで継続していたと考えられる。また、近世陶磁器なども確認されており、17～18世紀頃に集落が存在していた可能性がある。

本遺跡の近辺では、河後森城跡(北宇和郡松野町)の調査における出土遺物の分析から、時期が下るほど、より高位の郭を使用していた事実が指摘されている。岩倉城の落城は先に挙げた古記録の記述から、16世紀後半になると考えられている。遺物の出土状況から、低位に位置する南東麓の郭が落城直前まで継続して使用された可能性があり、岩倉城における城郭構造の変遷を明確に解釈する作業が望まれる。

本遺跡では10月22日(土)に一般公開を目的とした現地説明会を開催し、85名の一般市民の参加を得ることができた。

(郷田秀和)



位置図



遺跡全景(北東より)



遺構検出状況



柱穴内の遺物出土状況

しょうとくがもりじょうあと

15. 正徳ヶ森城跡

- 1 所在地 宇和島市三間町務田907-2外
- 2 所属時期 中世
- 3 調査期間 平成17(2005)年7月22日
～平成17(2005)年9月9日
- 4 調査面積 500m²
- 5 調査原因 県道広見三間宇和島線整備
- 6 担当者 片岡大介・藤本清志
- 7 調査概要

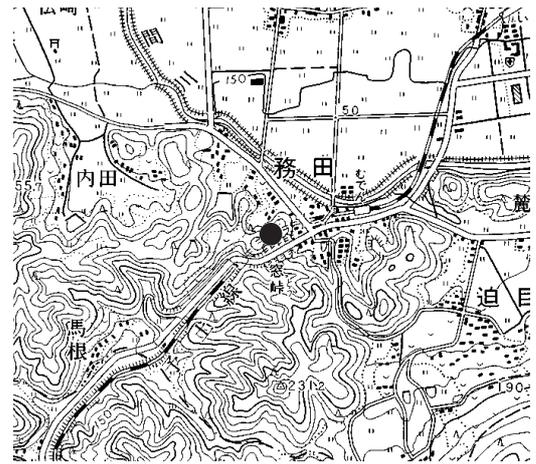
愛媛県南部及び高知県西部の四国西南部は、西園寺氏や一条氏、長宗我部氏等の戦国大名による勢力争いを背景に数多くの城館が築かれている。宇和島市三間町の中世城館跡については、大森城跡や金山城跡など29か所が確認されている。

調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「正徳ヶ森城跡」にその一部が含まれており、三間盆地南部の泉ヶ森・横ノ山山地から伸びる標高約180mの小起伏丘陵先端に位置する。北には三間川が三間盆地を東流し、鬼北町に入って広見川と合流する。北東から北西にかけて三間盆地を一望することができ、南は宇和島方面へ続く谷を見下ろすなど立地環境に恵まれている。

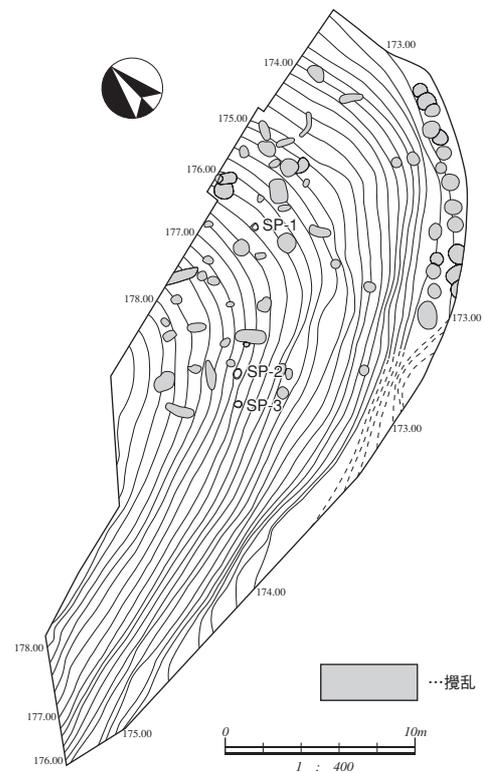
今回の発掘調査では、正徳ヶ森城跡の主郭と思われる平坦部は調査対象範囲から外れていたが、平坦部下の斜面にトレンチを設定し、土層の観察をしたところ、地山が切岸状に成形されたと思われる痕跡を確認することができた。調査区内においては小穴3口と近世墓を検出した。小穴は検出面からの深さが数cm程度であり、遺物も出土しておらず時期は不明である。したがって建造物跡が存在していたという積極的な評価は難しい。

調査区において中世城館跡に関する遺構・遺物の出土はなく、またその周辺で堀切等の防御施設を確認することはできなかった。郭は小規模であり、城館として機能していた可能性は低く、単郭構造の砦や狼煙台の機能が想定できる。伝承や分布調査によって中世城館跡として位置づけがなされている当遺跡の性格を、縄張り調査も含めて再検討する必要があると思われる。

(藤本清志)



位置図



遺構配置図



調査区遠景

かくがたにじょうあと

16.角ヶ谷城跡

- 1 所在地 宇和島市三間町務田866-2
- 2 所属時期 中世
- 3 調査期間 平成18(2006)年2月6日
～平成18(2006)年2月20日
- 4 調査面積 150m²
- 5 調査原因 県道宇和三間線整備
- 6 担当者 片岡大介・藤本清志
- 7 調査概要

本遺跡は宇和島市三間町南部に位置し、北部には法華津山脈が、南西部には泉ヶ森・槇ノ山山地が展開している。三間町中心部には四万十川支流の三間川が東流し、その周囲には三間盆地と呼ばれる低湿地・低位段丘が形成されている。本遺跡はこの三間盆地の南部に発達した泉ヶ森・槇ノ山山地から伸びる標高約185mの小起伏丘陵に位置する。

今回の発掘調査を実施した「角ヶ谷城跡」は、愛媛県や旧三間町による遺跡分布調査報告書や三間町誌にも掲載されてなかったが、地元では「城跡」と呼ばれていた。調査の結果、ここでは郭と切岸を確認することができた。

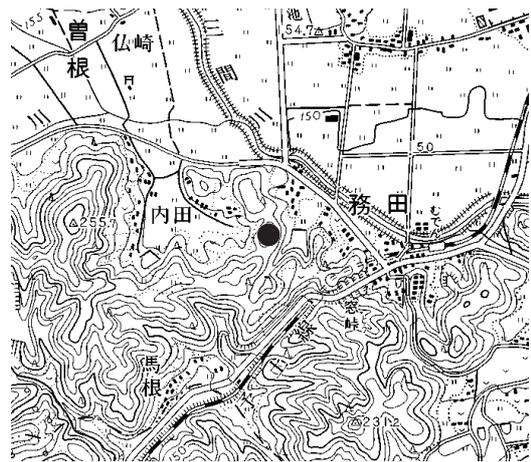
郭を確認したのは城郭全体の北端である。土層確認の結果、南から北へ緩やかに傾斜する斜面に盛土して成形されたものと見られる。地山成形を施した後に、黄褐色と黄色を呈する土を版築状に交互に盛っている。これは切岸の崩落を防ぐためであり、平面形はおそらく堤状を呈するものと推測される。最後に堤状盛土の内側に塊状の土で無造作に埋めるように盛土を行い、郭の平坦部を構築したと考えられる。

切岸は、その下端にあたる部分では堆積が薄く、表土層を除去するとすぐに岩盤が露出した。地山層を削平して、その傾斜角・比高差を確保したものと見られる。切岸の上端部、言い換えれば郭の縁辺部の盛土は崩落している可能性が高いため、その規模については推定の域を超えないが、現状より比高差は約2.8m、傾斜角は約45度を測る。

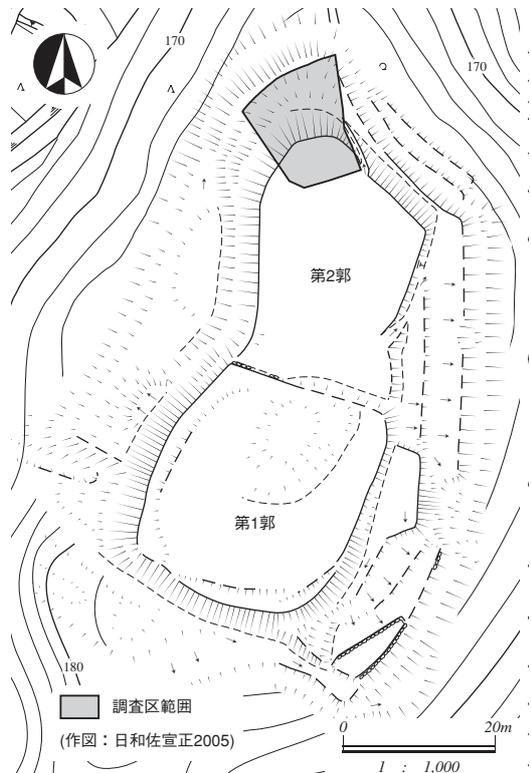
遺物は、郭盛土中からスクレイパーが出土し、調査区外で備前焼を表面採集している。

今回の調査により、宇和島市三間町における中世城館跡は30ヶ所となる。

(片岡大介)



位置図



縄張り図



土層堆積状況

ちょうしょうじじょうあと

17. 長松寺城跡

- 1 所在地 宇和島市保田乙461外
- 2 所属時期 弥生時代中期後半・中世
- 3 調査期間 平成17(2005)年8月24日
～平成18(2006)年2月17日
- 4 調査面積 3,700m²
- 5 調査原因 一般国道56号宇和島道路建設
- 6 担当者 池尻伸吾 高田明知
- 7 調査概要

長松寺城跡は旧宇和島市の南部に位置し、市域を流れる来村川左岸の丘陵地帯の一角にある。調査区は、この丘陵地帯のうち東側に突出した舌状丘陵の先端部にあたり、標高約72～80mの地点に立地する。

今回の調査では、周知の長松寺城跡(長松寺城B)の東側に隣接する城郭跡(長松寺城A)の調査を実施し、その構造や時期が明らかになった。

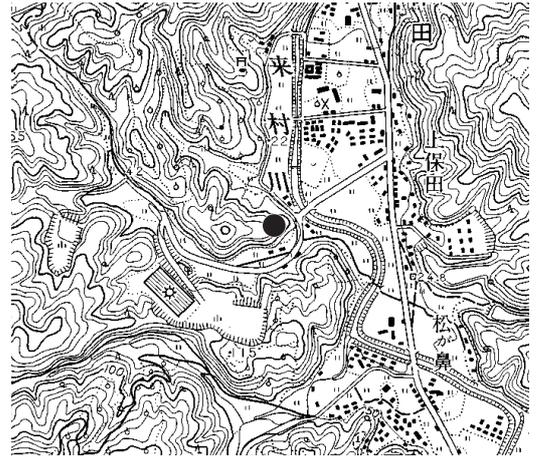
調査の結果、郭・堀切・土塁・柱穴・テラス状遺構等を検出した。時期的には、備前焼や青磁・白磁などの年代観から15世紀代のものであると推定され、長松寺城AとBの間には時期的に100年程度の開きがあることが明らかとなった。今回発掘調査を行った長松寺城Aは、長松寺城Bの西側約150mの地点にあり、両者の中間には遺構の存在しない空白地がある。また、時期的にも隔絶しているため別個の城郭であった可能性も考えられる。両者の関係を考えてみると、以下の可能性が想定される。

①長松寺城Aが15世紀代に構築され、廃絶されたのち、16世紀後半になり新たに長松寺城Bが築城された。

②長松寺城AとBの一部が15世紀代に造られ、使用期間を経て長松寺城Aが廃絶されたのち、16世紀後半に長松寺城Bの一部に放射状の縦堀や横堀を付加し、より防御性の高い城に造り替えた。長松寺城Bの実態が不明瞭であるため、憶測に過ぎないが、当時の一般的な城の構築手法から現段階では②の可能性が高いと考えられる。

長松寺城Aは、機能的には小地域を単位とする戦闘の際に使用された「逃げ城」と考えられ、今後この時期の政治・社会的様相を検討する際の貴重な資料となるものと考えられる。

なお、本遺跡では普及活動の一環として、2月25日(土)に現地説明会を行い、101人の参加を得た。(池尻伸吾)



位置図



遺跡遠景



柱穴列完掘状況



土塁検出状況

3 刊行した報告書の概要

本年度は別表にまとめたように第123集から第128集までの計6冊を刊行した。刊行した報告書の概要は以下のとおりである。

「神宮太郎丸遺跡」

今治市神宮に所在する神宮太郎丸遺跡の報告書である。弥生時代終末期と中世の遺構・遺物を検出してしている。また包含層資料ではあるが、縄文時代後期・晩期、古代の遺物も出土している。本書では各時期の遺構・遺物の概要を整理し、同遺跡の時間的・空間的な位置付けを行っている。

(西川真美)

「正徳ヶ森城跡」

宇和島市三間町務田に所在する正徳ヶ森城跡の報告書である。調査区からは小穴と近世墓を検出したが、中世城館跡に関する遺構・遺物の検出はなく、当遺跡の性格を再検討する必要があると思われる。

(藤本清志)

「千足遺跡」

伊予郡砥部町千足に所在する千足遺跡の報告書である。遺跡からは中世の掘立柱建物・区画溝と考えられる溝をはじめ多くの遺構を検出した。遺物は土師器の杯・皿を中心に出土している。本書では遺構・遺物の概要を整理し、遺跡周辺の景観復元を行っている。

(三好裕之)

「下川遺跡」

今治市山路・矢田に所在する矢田八反坪遺跡の報告書である。弥生時代から中世にかけての自然流路を検出してしている。本書では各時期の遺構・遺物の概要を整理し、同遺跡の時間的・空間的な位置付けを行っている。また、植物珪酸体分析や花粉分析などの自然科学分析もおこなっている。

(多田 仁)

「松原遺跡」

新居浜市寿町・松原町・西喜光地町に所在する松原遺跡の報告書である。本遺跡では弥生時代中期後半～後期初頭・中世・近世の遺構・遺物を確認した。弥生時代中期後半の遺構では竪穴住居を多数検出し、その中でも方形住居からは土器一括廃棄の状況が認められ、絵画土器などが出土している。また、他の住居からは中期後半の水差形土器が出土している。本書では、新居浜市の弥生時代中期後半～後期初頭にかけて出土した土器の編年的位置付けを行い、低地性集落の様相の一端を示すことができた。

(山中孝重)

「角ヶ谷城跡」

宇和島市三間町務田に所在する角ヶ谷城跡の報告書である。中世の遺構・遺物を検出してしている。本書では土層の堆積状況から、郭の構築方法について考察を行った。

(藤本清志)

平成17(2005)年度 報告書刊行一覧

シリーズ番号	刊行年月	報告書名 掲載遺跡名	面積(m ²)
第123集	平成17(2005)年10月	神宮太郎丸遺跡-一般県道今治丹原線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III-	520
第124集	平成17(2005)年11月	正徳ヶ森城跡-県道広見三間宇和島線整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-	500
第125集	平成18(2006)年3月	千足遺跡-一般国道33号砥部道路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-	1,200
第126集	平成18(2006)年3月	下川遺跡3次-四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III-西予市編(宇和町編II)	3,300
第127集	平成18(2006)年3月	松原遺跡-一般国道11号新居浜バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第2集-	5,300
第128集	平成18(2006)年3月	角ヶ谷城跡-県道宇和三間線整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-	150

4 道後公園（湯築城資料館）

1.事業の概要報告

文化財を活かした県有施設として、平成14年4月に道後公園(湯築城跡)内に、湯築城資料館と復元区域がオープンし、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが道後公園全体の管理運営・普及啓発事業を県から委託を受け、国史跡湯築城跡の活用および県内外への情報発信を行っている。

平成17年度は、道後公園来園者に湯築城資料館や復元武家屋敷等の解説・案内を行うボランティアの活用事業と、一般県民、児童生徒および来館者を対象とした普及啓発事業を行った。

また、広報誌「湯築城だより」を年2回発行し、広く情報発信を行ってきた。

なお、来年度4月から道後公園（湯築城跡）に指定管理者制度が導入されることとなり、今年度をもって、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターによる管理運営を終了することとなった。

(企画普及係長 中圓尾正)

2.湯築城資料館利用状況

年 月		開館日数	入館者数	備 考	
14年度		297	76,473		
15年度		310	48,948		
16年度		309	44,530		
17年	4月	26	7,348		
	5月	27	5,166		
	6月	26	3,106		
	7月	27	2,867		
	8月	27	3,666		
	9月	26	3,057		
	10月	26	3,788		
	11月	26	4,181		
	12月	24	2,405		
	18年	1月	24	3,049	
		2月	24	3,090	
		3月	27	5,176	
17年度計		310	46,889		
累計		1,226	216,840		

3.国史跡湯築城跡普及啓発事業の概要

(1)平成17年度親子で学べる湯築城講座

『つくってみよう！！湯築城』

開催日時 平成17年7月30日(土)、8月6日(土)

参加者 小学5・6年生親子28組(56人)

主催 愛媛県教育委員会・財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

内容 湯築城跡を見学し、各自で1/800の湯築城の立体模型を作りながら、中世の城のつくりについて学び、理解を深めた。

事例発表

「全2日間の工程で、1日目に地形に合わせて切り抜いた型を積み上げ、その上に紙粘土で肉付けし湯築城の城の形をつくる。2日目にくるわや道を着色し、城のつくりを学ぶ。

(2) 平成17年度湯築城資料館企画展

「河野通信－源平の争乱を生きぬいた武者－」

期間 平成17年12月11日(日)午後1時30分～3時

会場 愛媛県美術館講堂

参加者 約100名

主催 愛媛県教育委員会・財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

講師 愛媛県歴史文化博物館学芸課長 石野弥栄

「河野通信の栄光と挫折」

(3) 広報誌「湯築城だより」

号数	刊行	記事
第7号	17年12月	特集記事 : 「特集!湯築城出土の輸入陶磁器」 イベント紹介 : 「親子で学べる湯築城講座」 ミニギャラリー : 「瓦」 中世を知ろう : 「石手寺」 ほか
第8号	18年3月	特集記事 : 「特集!河野通信－源平の争乱を生き抜いた武者－」 イベント紹介 : 「平成17年度湯築城資料館企画展」 ミニギャラリー : 「伊予小札」 中世を知ろう : 「河野通信活躍の記録と人物像」 ほか



親子で学べる湯築城講座(模型づくり)



湯築城資料館企画展 展示

え ひ め
愛比売

—平成17(2005)年度年報—

平成18(2006)年6月30日

編集・発行 財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター
〒791-8025 愛媛県松山市衣山四丁目68番地-1
TEL (089) 911-0502 FAX (089) 911-0508
印 刷 アマノ印刷有限公司
